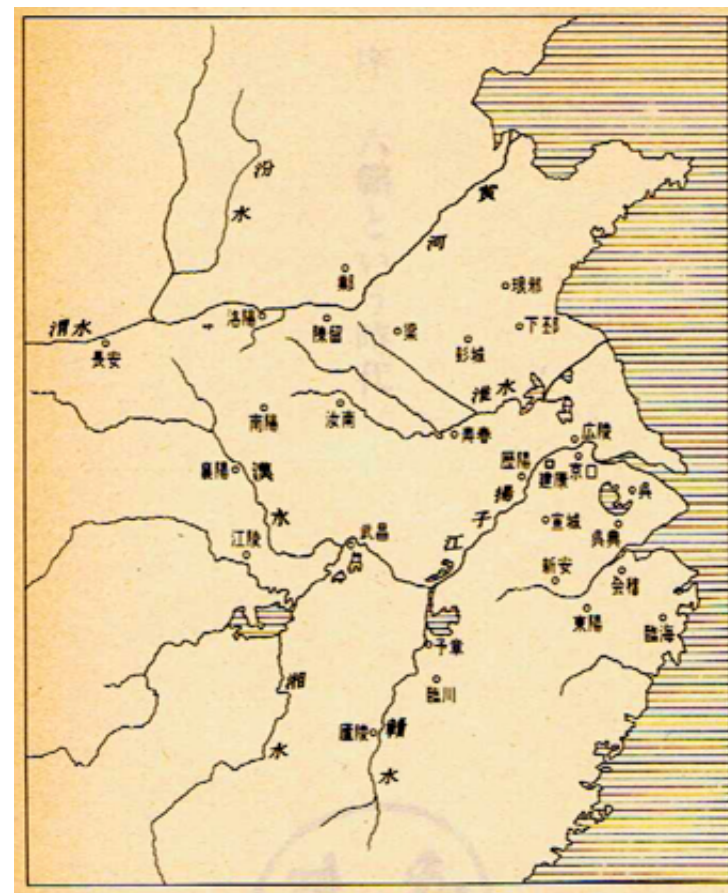
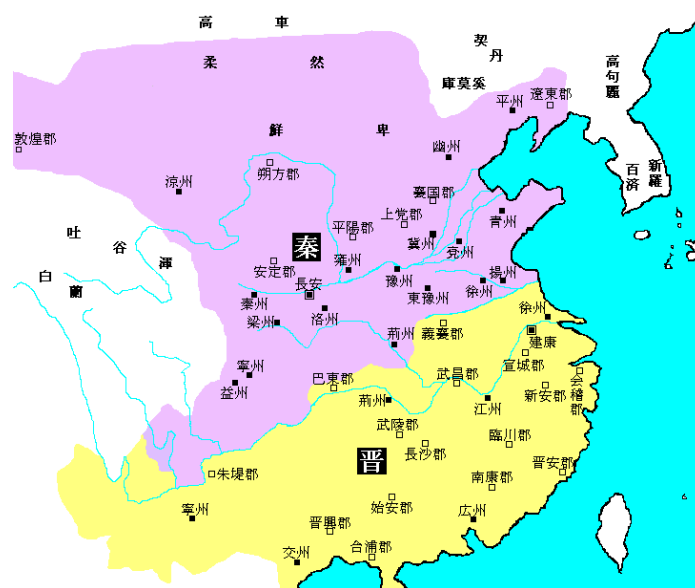




ちくりんしちけん  
竹林七賢





時代背景

## 殷浩と桓温と王羲之

羲之と殷浩は古くからの友人であった。永和二年（346）殷浩が揚州刺史に就任したとき、江州刺史であった羲之は殷浩の頼みにより江州刺史をやめて護軍將軍として中央政府に籍をおいたが、しばらくして地方転出を願い、永和七年（351）右軍將軍・会稽内史として赴任した。羲之を王右軍とよぶのはこのためである。当時、右軍將軍といっても名目だけの官になっていた。内史は郡の長官のような職で10県を統轄していた。殷浩に代わって桓温派の王述が揚州刺史に就任した。羲之は355年病気を理由に辞任し隠遁する。

桓温（312―373）は殷浩と幼なじみで、妻は明帝の娘であった。強大な軍事力を握り皇帝になろうと目論んだが失敗した。桓温の力に危機を感じた会稽王はその対抗馬として殷浩を登用し北伐軍の長に就けた。352年9月殷浩は北伐し敗退、桓温はそれを弾劾して殷浩を失脚させた。永和十年（354）殷浩はすべての官爵を剥奪され蟄居を命ぜられた。356年桓温は洛陽を奪還し東晋の実権を完全に握った。363年桓温、大規模な土断を実行した。

永和八年（352）正月会稽地方に非常時動員令が発せられた。殷浩の北伐が行われた。

華北は漢人の先祖の墓のある心の故郷であり、華北の奪還に東晋の人びとの悲願であった。

352年の殷浩による北伐以前に何度も北伐が試みられたが挫折のくり返しであった。

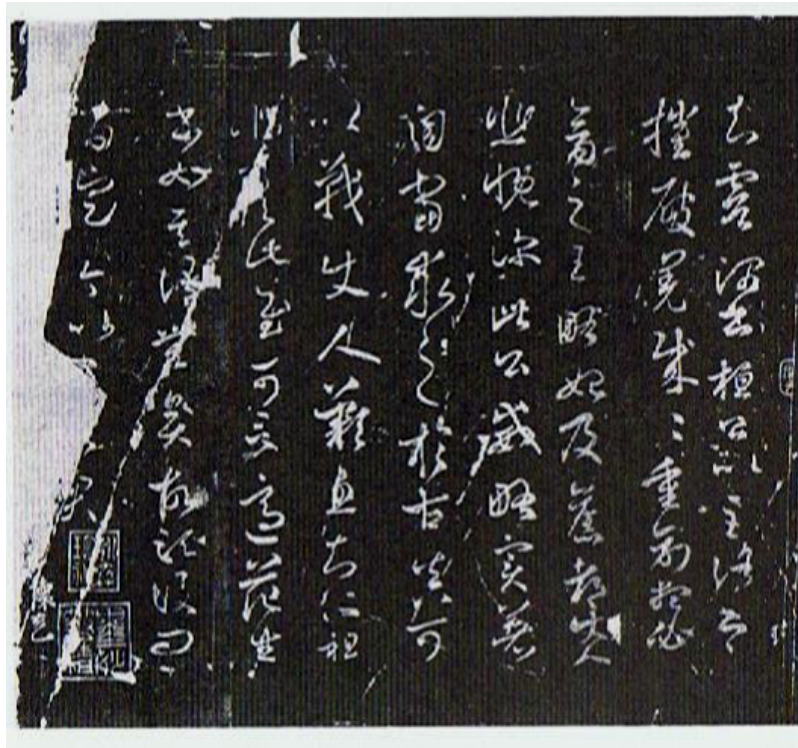
## 羲之の手紙より抜粋

「ぼくにはかねてから廟堂に列する意志はありません」

「・・・天下の民が息をつけるようにしていただきたいのです。東晋が建国されて以来、徳化と寛容を国是とし、武力抗争はつとめてさけ、こうした美点によつてこそ大業をなしとげた由来はよくご承知のことと思います。胡族が跳梁しだしてから、・・・忠言やよきはかりことは棄てて用いられず、天下はいまにも土崩瓦解しようとしているのです。なげき悲しまずにおれましようか。・・・こんごは謙虚に賢才をもとめ、有識者と協力し、これ以上、正論が権力によつておさえられることがあつてはなりません。いま外においては軍隊は敗れ、内においては財政が逼迫しています。淮水の防衛線を維持することはむづかしくなりました。揚子江まで防衛線を縮小し、各軍団長はもとの鎮所に復し、揚子江以北の地は羈縻するだけ



にとどめてはいかがでしょうか。国政の総責任者は、おかしな過ちの責任をとって地位をくだり、民にたいして謝罪する。そして政府要人とともに公平な政治の施行につとめ、煩雑苛酷な法令をのぞき、賦役を軽くし、民とともに再出発してください。そうすれば不平不満をくいとめ、危機をのりきることができましょう。・・・ぼくの意見が必ずしも採用されないことは知っています。あるいは政権担当者の怨みをかうことになるかもしれません。それでもぼくの気持ちとして、心に思っていることを洗いざらいいわずにはおれないのです。どうしても北伐をおこなうというのなら、ぼくの道理がわかってもらえないのだし、北伐の強行は愚者智者ともども理解できぬところです。どうか衆人の意見を見ないでください。・・・先年来、民衆にたいする搾取は強化され、刑徒は道にあふれ、秦の始皇帝時代の苛政とことなるところはありません。ただ三族みな殺しの刑がないだけのちがいです。秦の無道に抵抗した陳勝や呉広の叛乱がまたおこるおそれは目にみえています・・・」(敗北したにもかかわらず、再び北伐を計画している殷浩へ宛てた手紙)



「本郡の疲弊がここまでひどいとは思ってもよらなかった。・・・いったいどこから手をつけたらよいのか・・・」  
「民の流亡をくいとめねばならない。・・・」

「糧秣輸送のための人員はともそろえられそうにない。・・・かれらの逃亡が気がかりで、ぼくはもう



くたくたです」「非常時動員令が発せられていらい、兵役や糧秣輸送に徴発されたもので、死亡しあるいは逃亡してもどつてこないものが多数います。民力は疲弊をきわめ……どこもここも弱りはてて、なすすべもありません。……徴発された民衆は、道中で多数逃亡し、処罰をおそれた監督の小役人まで……遁走してしまふありさまです。……逃亡者の家族および隣組のものに捕縛を命ずるのですが、……とらえられないと、家族も隣組のものまで……逃亡をはじめなのです。民衆が流亡し、人口が日一日と減少してゆく原因はここにあります」

「……桓公の十月末の便りをうけとり、安心しました。……殷くんからは、北方の情勢はどうなったかと再三たずねてきます。……」(桓温へ)

羲之は永和十一年(355)三月五日官界を去った。東晋政局の大転回にとまなうものと想われる。

「……私はさきにここ東方の会稽へまいりまして、この土地の美しいながめをひととおりたのしむことができました。私はかねてより逸民となりたいたい考えをもっていたのです。……」

「……ちつぽけな一地方官づとめにすぎないのに、政治がうまくゆかぬことばかりを気にかけ、いつもそのことを恥じているしだいです。」

「……四郊に墨多し、とてもよぶべきいま、人それぞれにはげむべきである。それなのに、虚談にふけるばかりで任務をほっぽりだし、浮文をめぐるだけで要務のさまたげとするのは、時宜にかなったことではないぞ」(謝安への言葉)



「……朝議の結果、私の願いは未永くゆるされることがきました。このよろこびは、なのものにもたとえようがありません。今また私の気持ちを先祖の霊前に報告しました。その誓墓文を足下におめにかけます。万感胸にせまるおもいです……」

#### 以下父母の墓前でささげた「誓墓文」

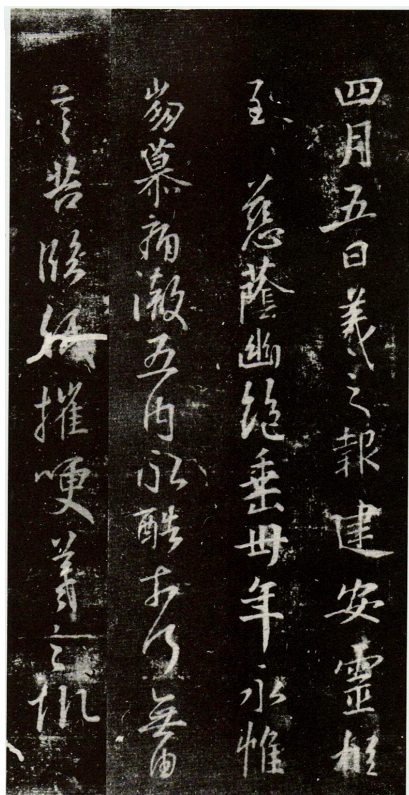
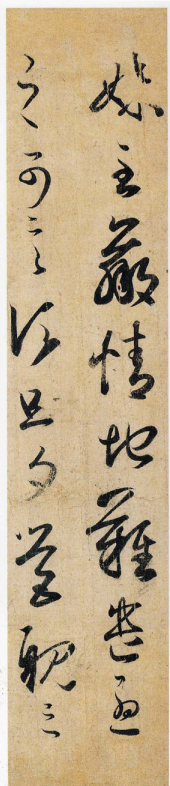
「不幸にも羲之は幼くして父上を失い、その庭訓をうけることができませんでした。母上、兄上のいくしみのおかげでどうか一人前に成長をとげ、人材にとほしきおりから、国家の寵榮をかたじけなくするにいたりました。しかし、忠孝の節義にかけ、また賢者をすすめることも小生にはできません。老子や周任の謙讓をすすめる箴言を口にしては、いつもいまに破滅がおとずれるぞとおののいていたものです。不幸は先祖の霊にまでおよび、わが身だけにとどまるものではありません。このため、寝てもさめても歎きはず、ふかい谷底にころげおちたような気持ちです。官界でこれ以上なものぞむべきでないけじめは、いまにこそあるのです。謹んで今月吉日をもつて筵席をしきのべ、先祖の霊前にぬかずいて、真心から誓いあげます。今後もし心がわりをおこし、かりそめの出世榮達をのぞむようなことがあれば、これは父母を敬わないものであり、子とよぶことはできません。子でありながら子たる資格にかけるものは、天地もその存在をゆるさず、世間の良識もゆるしますまい。この真心からの誓いは、日のごとく明らかです」

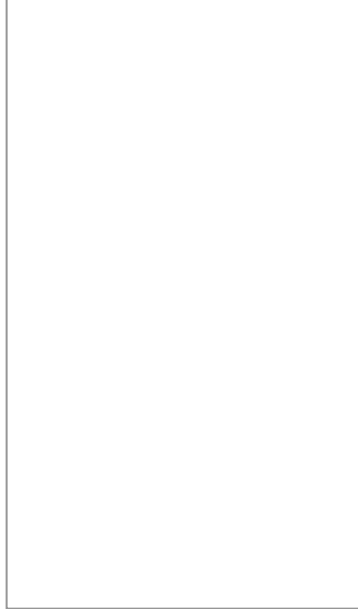
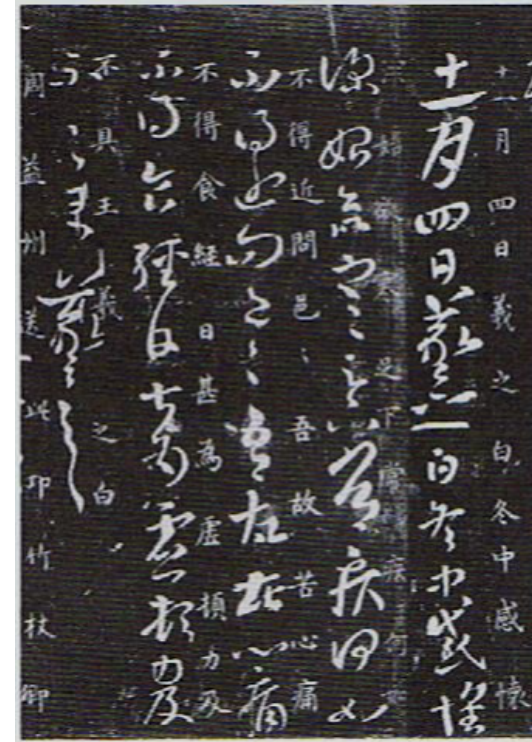
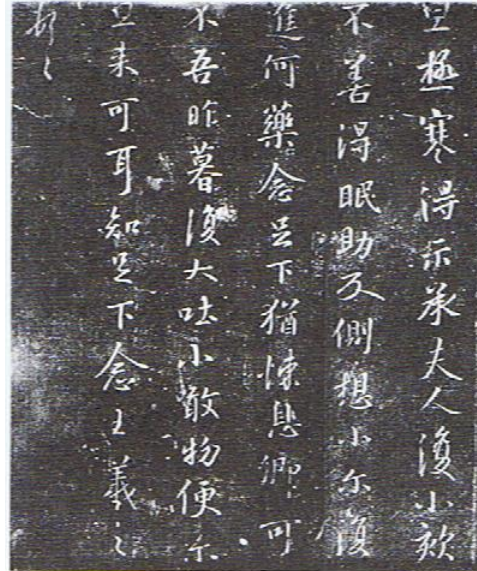
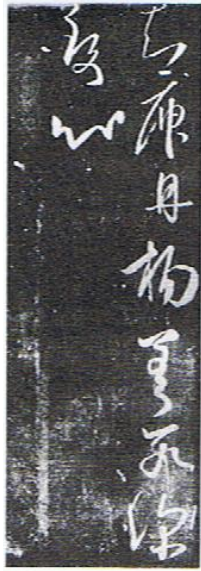
## 手紙（この時代手紙の書が芸術であった）

日本では手紙のことを、「啓」<sup>けい</sup>「状」<sup>じょう</sup>（奈良時代）「書状」<sup>しよじょう</sup>「往来」<sup>おうらい</sup>・・『礼記』の「礼尚往来」<sup>れいはおうらいをたつとぶ</sup>より（手紙は往信に対して返信のあることを礼とする意識を含んでいる）「消息」<sup>しやうし</sup>・・しようにそこ。（安否を問い、用件を伝えて心の不安を消し息むの意）「女消息」<sup>や</sup>「仮名消息」など「手紙」は江戸時代からの呼び方。中国では手紙は春秋時代（紀元前8世紀―前5世紀）から発生したようである。「書簡」<sup>しよかん</sup>（簡は竹札）「書翰」<sup>しよかん</sup>（翰は鳥の羽。ペン）「尺牘」<sup>せきしやく</sup>（漢代の詔書が一尺一寸の木板に書いたところから尺という。漢の一尺は22・5cm。牘は木板）「尺素」<sup>せきそ</sup>（素は白絹）「寸楮」<sup>すんちよ</sup>（楮は紙）「書」<sup>しよ</sup>「書信」<sup>しよしん</sup>「疎」<sup>そ</sup>「箋」<sup>せん</sup>「魚信」<sup>ぎよしん</sup>などと呼ぶ。

## 王羲之の手紙（七百数十帖が知られている）

他に例がないほど多くの手紙が伝わっている。それらの多くが身内や友人の健康や安否を気遣う日常の手紙である。そこから王羲之の暮らしぶりや、こまやかで優しい思いやりのある人間性が見えてくる。







そらんじょう

喪乱帖 ・「喪乱帖」 8行、「二謝帖」 5行、「得示帖」 4行が一卷になっている。掛軸。

縦25・8×横58・2cm・17行131字。 搨模本。 白麻紙の縦簾紙。 唐代に双鉤填墨されたとも。

とうもぼん

はくまし

じゅうれんし

そうこうてんぼく

真跡に最も近いと思われる。手紙二通と五つの断片か。名称は一行目の「喪乱」の二字よりつけられた。行書で晩年期の書風か。奈良代に唐から将来されたい。宮内庁三の丸尚蔵館蔵。

※搨模…敷き写し書きのこと。

※縦簾紙…幅6mm〜1cm位の間隔で縦に簾目様の線のある料紙。中国では簾紋紙と呼ぶ。漉き目ではなくヘラによる空

すだれめ

れんもんし

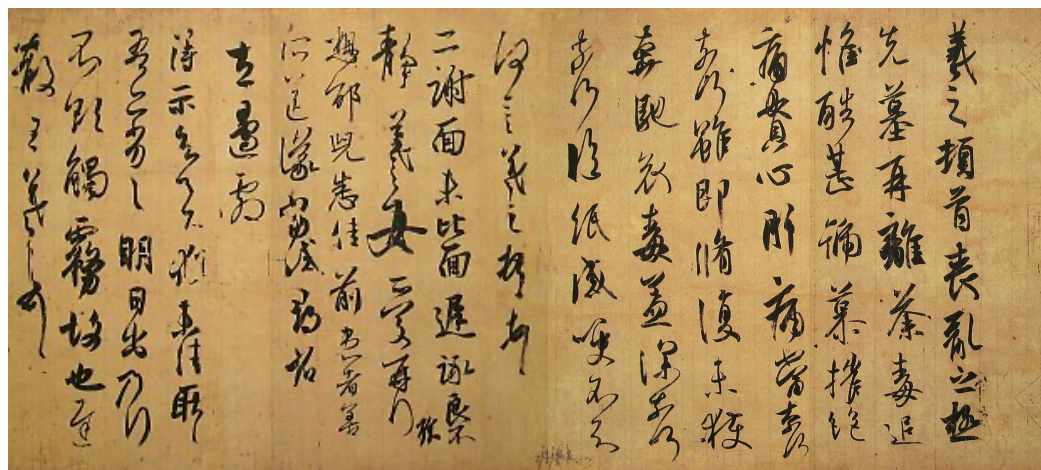
から

野もある。

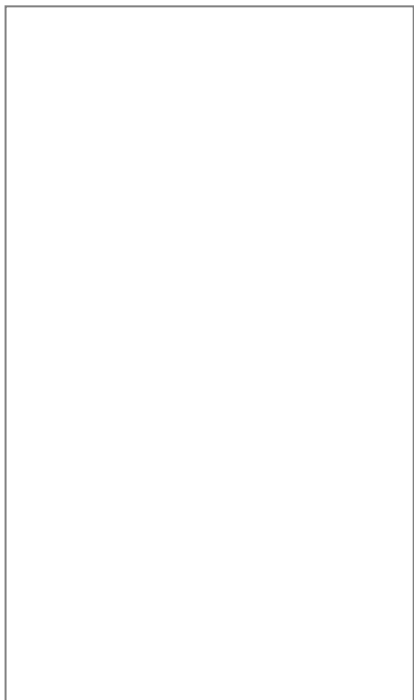
※双鉤填墨…「双鉤」とは籠字にすること。「填墨」とは籠字の中を墨で塗りつぶすこと。

けい

けい



得示帖





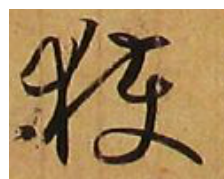
起筆の多様性（命毛の先まで筆意を込めようとするために工夫されたか）



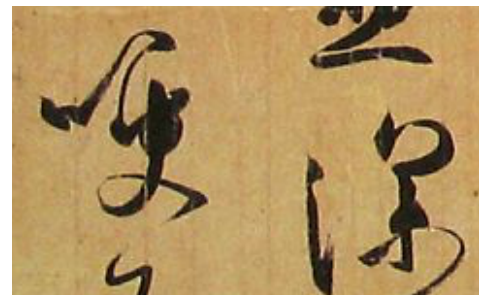
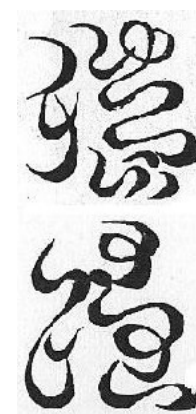
送筆部の変化



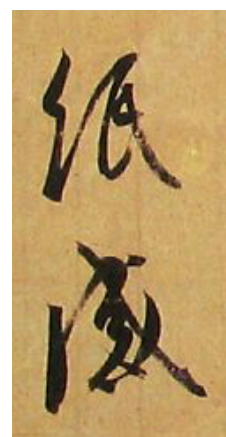
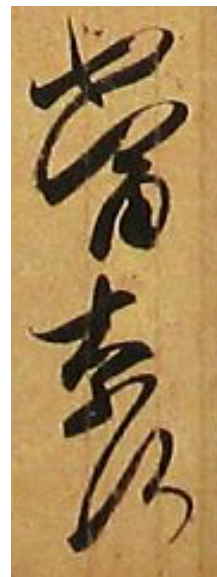
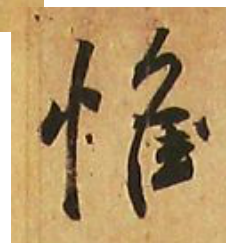
収筆部の変化



雑体書の採用（雑体書は六朝時代に頂点に達した）

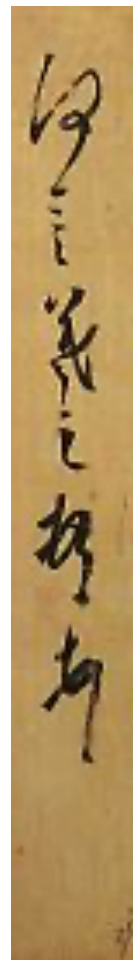


力の均衡による構成（形と線の美） 心のありようが歪みを生む  
結構法（運筆のリズムの結果） 運筆に感情をのせる。字の左下に力。

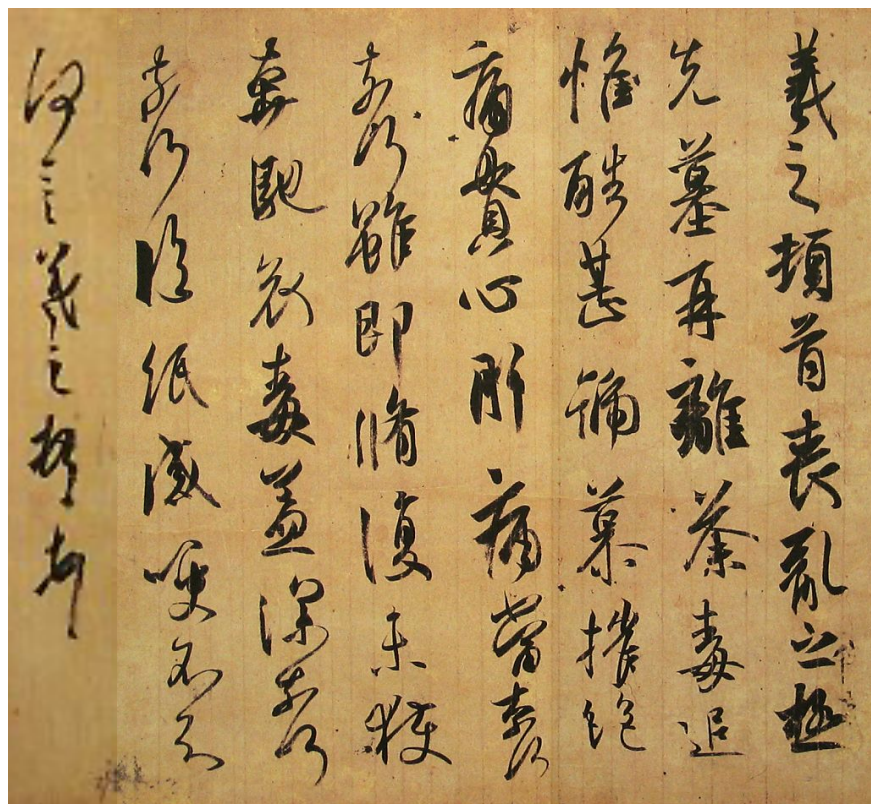




行の構成（文字の大小、細太の変化とリズム。上下左右の組み合わせ。字間の粗密。感情の起伏が歪みやうねりを生む）



全体の構成（行間、余白など）一目で作品から受ける雰囲気。



**用筆法**（形としてだけ見ないで動きや呼吸としてとらえるために用筆法が大切になる）

**古法** こほう 王羲之が確立した書法。側筆を主体とする。

さまざまに変化する筆圧。（側筆には側の側から側の直まで無限にある）

**新法** しんぽう 顔真卿の楷書の書法。直筆を主体とした筆法。二つの筆圧で組み立てられている（縦画は

高圧、横画は低圧）顔真卿の行草書には古法がまじっている。古法あつての新法である。

**王羲之の「八面出鋒」** はちめんしゅつぽう（「八面露鋒」 はちめんろほうともいう。「八面」とは、すべてという意で、直・側・蔵・

露鋒など鋒のすべてを自在に使った書きぶりのこと。「易」 えきの陰陽五行説を導入。「陰陽俯仰法」 いんようふぎやうほうという。）

**陰陽俯仰法** いんようふぎやうほう

陰一俯（掌が下向き）一閉一表一勁一縦線 てのひら

陽一仰（掌が上向き）一開一裏一緩一横線 うら

円を描いてみよう。（蓄線 ちゆうせん）単鉤法・側筆で書くこと（進行方向に筆管を倒す）双鉤法は新法 そくこうほう

の法（指が増えるほど直筆にしやすいから）。「間」 まがあるところで陽から陰に変わる（表裏が変わる）



「痛」を書いてみよう。

